様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００６６５

研究課題名（和文）フリーライダーと二次的文法化：構造変化としての文法化理論の構築に向けて

研究課題名（英文）Free-rider and Secondary Grammaticalization

研究代表者
大澤　ふよう（Osawa, Fuyo）

法政大学・国際日本学研究所・研究員

研究者番号：１０１９４１２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究で文法化は二段階で進行することを理論的に確立できた。従来明らかにされてこなかったその本質について明確化した。文法化は、最初にその機能範疇という「場」をうみ出す一次的文法化とその出来た「場」のおかげで起こる二次的文法化 の二段階で構成されている。一次的文法化に関わる語彙項目は、機能範疇という場を生み出すことに貢献した牽引役(driving force)であり、二次的文法化に関わる語彙項目は牽引役によってうみ出された「場」に入り込むことにより、自身は貢献することなく文法化したものであり、これらをフリーライダー(free rider)と名付けた。本研究で構造変化としての文法化を提案できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
この研究は、構造変化としての文法化も存在することを明らかにした。「機能範疇という場所の出現」という文法化である。これに基づいて文法化を第一次文法化、第二次文法化と分けて２段階で進行することを理論的に確立した二次的文法化論は、この分野においても世界で初めての提案である。文法化は、歴史言語学の分野では大変関心の高い項目であり、この研究は日本国内だけでなく、国際的にも意義深いものである。
　また、この理論で実証されるのは、英語の冠詞である。日本人にとっては、冠詞は習得が難しいものとして知られているが、この歴史的に深堀りされた研究は、日本人の英語習得にとっても何ら化の貢献ができたのではないかと考える。

研究成果の概要（英文）：I have proposed that grammaticalization progresses in two stages: primary grammaticalization and secondary one. The two stages involve two participants, contributor and free riders. Two articles, the definite and indefinite articles in Present-day English, had precursors in Old English. I argue that those ancestors contributed differently to the grammaticalization process in question (i.e., the emergence of a DP). One is a hard worker, hence a contributor, and the other is a free rider. A contributor triggers a given change or contributes to the change, while “free riders”are grammaticalized thanks to the contributor. There are differences between these two participants in the degree of their contribution to grammaticalization.
I argue that this difference in contribution is related to the distinction between primary and secondary grammaticalization. I have proposed that grammaticalization brings about the structural change in a given structure.

研究分野：Historical syntax

キーワード：第一次文法化　第二次文法化　構造変化　フリーライダー　定冠詞　不定冠詞　助動詞

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

文法化は、歴史言語学者の間ではよく取り上げられる関心の高いトピックであり、多くの論考が出版されている。。Meillet (1912) に始まり、Lehmann (1982), Heine and Kuteva (2002), Hopper and Traugott (2003) など多くの優れた研究が上梓されている。それと同時に Newmeyer (1998), Norde (2001)などによる文法化に対しての批判も多く展開されている。文法化は一方向に変化していき、不可逆的であるという一方向性仮説 (unidirectionality) に対して、例えば、Ramat (1992)は、fascism から ism という語が生まれる例などを挙げて拘束形態素が語になっている脱文法化(degrammaticalization)という真逆の現象を示す例があるということで批判を展開した。否定的な研究も多く存在すると言うことはそれだけ理論的な価値も高いということである。

本研究を開始するにあたって、従来の文法化理論では、「語彙項目が内容語から機能語に変化していく」という語彙レベルでの変化が主な研究対象であったことへの再検討がまずあった。この点の分析が重要であることに異議はない。それに加えて、統語構造の変化という側面から文法化をとらえるという主張をしていく必要性を感じていた。このような視点での研究を発表している研究者は数が少なく、この視点からの独自研究を世界に問うことは意義があるだろうと考えた。

また、文法化が一次的文法化、二次的文法化と２段階で進行していくという考え方を、さらに新しい分析を用いて検討していくことが必要な段階にあった。この二段階説は従来から存在し、Kuryłowicz (1975 [1965])に遡り、主な先行研究としては、Givón (1991), Hopper and Traugott (2003) がある。いずれも基本的な考え方としては「いったん文法化した語彙要素が more grammatical になっていくこと」であるとされる。この「さらに文法的なるもの」とは具体的に何を意味するのかは明確には定義されていない。この定義では、両者の本質的違いが不明である。二次的文法化学会は、一次的文法化を扱う学会に比べると数も少なく過去においてもあまり開催されてはいない。上で述べた、構造変化としての文法化という視点を導入することで二次的文法化の本質を解くことが可能になるのではないかという予測もされた。

２．研究の目的

本研究の目的は、語彙項目が内容語から機能語に変化していくという語彙レベルでの変化に加えて、「新しい場所＝機能範疇」を従来の構造に加えて創出することであるという、「構造変化としての文法化」を提案し実証していくことである。１で述べた従来型の「語彙的要素が意味の漂白などで文法的要素になる」文法化に加えて、構造変化としての文法化もあるということを提案する。具体的に言うと、必ずしも意味に基づかない機能範疇という場所が、意味に基づき構成されている投射構造の上にかぶさるような形で出現したということである。

この構造変化としての文法化という分析により、従来あいまいであった、一次的文法化と二次的文法化の違いを明確化することができるようになる。この機能範疇という新しい場所が統語構造の中に常駐することにより、その「場」に入った新たな要素をその「場」の力で文法的要素にしてしまうことが可能になる。こうして二次的文法化が可能になったと提案する。つまり、文法化は、最初にその機能範疇という「場」をうみ出す一次的文法化(primary grammaticalization)

とその出来た「場」のおかげで起こる二次的文法化(secondary grammaticalization) の二段階で構成されていること、一次的文法化に関わる語彙項目は、その機能範疇という場を生み出すことに貢献した牽引役(driving force)であり、二次的文法化に関わる語彙項目は牽引役によってうみ出された「場」に入り込むことにより、自身はあまり貢献することなく文法化したものであることを提案する。二次的文法化で文法化したものを仮にフリーライダー(free rider) と呼ぶことにする。
この二次的文法化の考え方は、従来の二次的文法化とは全く違うものである。二次的文法化という考え方はKuryłowicz (1975 [1965])に遡り、主な先行研究としては、Givón (1991), Hopper and Traugott (2003) がある。いずれも基本的な考え方としては「いったん文法化した語彙要素が more grammatical になっていくこと」であるとされる。この「さらに文法的なるもの」とは具体的に何を意味するのかは明確には定義されていない。本研究は、構造変化としての文法化という観点から、構造による文法化が二次的文法化の本質であり、この二次的文法化が文法化という言語変化を、広範囲に影響を及ぼす強力なものに押し上げてきた要因であると提案することができた。

３．研究の方法

この研究は、理論的な組み立てを軸にしながら、歴史コーパスを活用することで仮説を協力にサポートしていくという２本立ての方法で行った。まず文法化理論を総括し、従来型の文法化に加えて構造変化としての文法化も存在することを理論的に確認した。
「機能範疇という場所」が創出され統語構造の中に常駐することにより、その場における二次的文法化が可能となったことを英語史に起こった変化によって実証した。二次的文法化とは、一次的文法化の牽引者である語彙項目とは違い、必ずしも文法化する必然性のない語彙項目がその「場」に入り込むことにより、その「場」のおかげで文法化し機能語・機能範疇となることである。従って、二次的文法化は、一次的文法化より時間的には後で起こる。 実例として定冠詞の出現を一次的文法化、不定冠詞の出現を二次的文法化として分析し実証した。一次的文法化は、まず古英語において存在していた指示詞se, seoが牽引役となり定冠詞theが出現し、このことにより、冠詞を置ける「場」が常駐することになった。数詞numeralのan (=one)が、牽引役se, seoが生み出した「場= D」の中に入り、その「場」のおかげで不定冠詞a/anとなった過程が二次的文法化であり、フリーライダーは不定冠詞 a,あるいはその先駆体である数詞anである。古英語の散文を集めた電子コーパスThe York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English (YCOE) 、中英語のコーパスであるThe Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Phase II (PPCME2) を使い、それぞれの先祖形の変遷について、年代別、テクスト別の調査を行った。一次的文法化を引き起こす牽引者たる要件をできるだけ明確な形で、コーパスを活用して数値を含めて提案することをめざした。それは同時にフリーライダーとなる要件を提案することであるが、先駆体は、どの時代においても存在し、かつ、意味的にそれほど具体的ではないなどの、いくつかの特徴が見いだせた。

４．研究成果

最初の段階では、今まで全く提案されてこなかった「場」による文法化という考え方に、理論

的な肉付けをすることに集中した。必ずしも意味に基づかない機能範疇という場所が、意味に基づき構成されている投射構造の上にかぶさるような形で出現したということが「文法化」の本質であるという考え方を提案し、この機能範疇という新しい場所が統語構造の中に常駐することにより、その「場」に入った新たな要素をその「場」の力で文法的要素にしてしまうこと、こ れがが可能になったという仮説を理論的にも根拠のあるものであることを、格理論などを援用して組み立てた。そしてこれが「二次的文法化」の本質であるというところまで到達した。 具体例として定冠詞の出現が第一次文法化の具現であり、もともとは数詞であったものが不定冠詞として出現したことが第二次文法化の具現であり、不定冠詞が、フリーライダー(free rider)であるという仮説を、萌芽的ではあるが、コーパスからのデータを入れて数量的にも補強し、かなりまとまった形にすることができた。２０１８年の 8月にイギリスのエジンバラ大学を会場にして開催された第２０回 International Conference on English Historical Linguistics において、この提案を研究発表することができた。世界最初の提案であると思われるので、いくつかの疑問点は当然出されたが、かなり好意的な評価を得たと確信している。

さらにその後、理論を精緻化し、文法化は、最初にその機能範疇という「場」 をうみ出す一次的文法化(primary grammaticalization)とその出来た「場」のおかげで起こる二次的文法化(secondary grammaticalization) の二段階で構成されていること、一次的文法化に関わる語彙項目は、その機能範疇という場を生み出すことに貢献した牽引役(driving force)であり、二次的文法化に関わる語彙項目は牽引役によってうみ出された「場」に入り込むことにより、自身はあまり貢献することなく文法化したものであり、これらをフリーライダー(free rider)と名付け、二種類の要素が存在することを実証した。これにより、従来曖昧であった、二次的文法化と一次的文法化の本質的違いを明確にすることができた。

次の段階では、フリーライダーという存在に着目した初めての研究である点に加えて、構造変化という観点での文法化という分析を国際学会を含めて数回発表した結果かなり評価されてきたと考えている。さらに、現代英語の不定冠詞 a/an の前身である、古英語の数詞 one 'an' に対して、競争相手として、some の古英語時の前身 sum の存在に着目した。様々な意味的観点や、その古英語のテキストの中での用いられ方を勘案すると、この sum が不定冠詞として文法化される可能性が高かったのにもかかわらず、実際に不定冠詞としての地位を獲得できたのは、2 番手であった an のほうであった。sum がなぜ an との 闘いに敗れて不定冠詞にはなれなかったのか、という点を明らかにすることは、二次的文法化の本質を明らかにし、フリーライダーの要件を定める点においても重要なことである。 牽引役としての要件、フリーライダーとしての要件を具体的な数値で完全に表す段階までは到達できなかったが、単なる数だけでなく、古英語のテキストを綿密に読むことから得られた予備的な数値化はある程度できたと考える。さらに、冠詞の出現が、英語に二重目的語構文(Double Object Construction) をもたらすことになったことを、この冠詞の出現が及ぼした影響と変化という ことを探っていくうちに、副産物のように、明らかにすることができた。現代英語に存在する二重目的語構文はかなり、制約の多い特殊な構文であり、古英語には、同じ制約を持つ構文は存在していなかったことを明らかにした。この研究は、Cambridge Scholars Publishing 社から出版された Studies in Linguistic Variation and Change 3 というタイトルの論文集の中に含めていただくことができた。文法化研究が、狭い意味での語彙の変化だけではなく、新しい構文をもたらすものである、つまり、構造変化としての文法化という主張を裏付ける大きな一歩になったと考えている。

このように研究全般は、おおむね、順調に進行し、かなりの成果をあげたと考えられる。しかし当初の予定の研究を行っているうちに、あらたに研究対象が次から次へと表れて、拡大し深化

していった。これは有意義なことであるが、予定していたようには進まなかった分野もある。助動詞における文法化の問題で、どの助動詞が牽引役で、どの助動詞がフリーライダーであるかという点を明らかにすることにも相応の時間をさきたいと考えていたが時間の配分が難しく、名詞句や冠詞の分の研究の進行に比べるとやや物足りないともいえる。先に述べたように二重目的語構文も冠詞研究の副産物として登場した研究であり、出版できたことはかなりの成果であるが、時間的に厳しいことにもなった。助動詞の文法化現象の完全な解明は将来の研究に引き継ぐことにする。歴史コーパスを使い、データを収集し、牽引者、フリーライダーの候補をある程度絞ることができればと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Fuyo Osawa	４．巻 1
２．論文標題 The rivalry between definiteness and specificity:The grammaticalization of definiteness in DP emergence	５．発行年 2022年
３．雑誌名 English Noun Phrases from a functional-cognitive Perspective	６．最初と最後の頁 79, 106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/slcs.221	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Fuyo Osawa	４．巻 1
２．論文標題 Transitivity and impersonals: Case, transitivity and argument structure	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本英文学会第９２回全国大会Proceedings	６．最初と最後の頁 ―
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 Fuyo Osawa	４．巻 1
２．論文標題 What the Emergent DP brought about: the Emergence of the Double Object Constructions in English	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Studies in Linguistic Variation and Change 3:Corpus-based Research in English Syntax and Lexis（単行本）	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Fuyo Osawa	４．巻 1
２．論文標題 The Development of Gerund Constructions in the History of English	５．発行年 2018年
３．雑誌名 No.78　Bulletin of the Faculty of Letters: Hosei University	６．最初と最後の頁 111, 123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　7件）

１．発表者名 Fuyo Osawa
２．発表標題 Semantics meets Syntax: Diachronic Study of Tag Questions
３．学会等名 12 Studies in the History of the English Language Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Fuyo Osawa
２．発表標題 What is behind the Word Order Change?: the Emergent Functional Categories Drive Innovation
３．学会等名 25th International Conference on Historical Linguistics（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Fuyo Osawa
２．発表標題 The emergence of a syntactic obligatory article system in Middle English: everything took place in the Middle English period
３．学会等名 International Medieval Congress（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Fuyo Osawa
２．発表標題 Transitivity and impersonals: Case, transitivity and argument structure
３．学会等名 日本英文学会第９２回全国大会シンポジウム第１０部門More Thoughts on (In)transitivity in the History of English and Related Issues（ウエブ 学会）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Fuyo Osawa
２．発表標題 Secondary Grammaticalization: Its True Nature
３．学会等名 Studies in the History of the English Language 11（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大澤　ふよう
２．発表標題 二次的文法化ーその本質に迫る
３．学会等名 近代英語協会第36回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Fuyo Osawa
２．発表標題 The Rivalry between Definiteness and Specificity: the Emergence of DP in English
３．学会等名 The English Noun Phrase: Synchronic and Diachronic Perspectives（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Fuyo Osawa
２．発表標題 Contributor, Free Rider and Loser in Grammaticalization
３．学会等名 20th International Conference on English Historical Linguistics（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 大澤　ふよう(第１章）、都田青子、田中真一、八木斉子、上田功、原惠子	４．発行年 2021年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 228
３．書名 音声学・音韻論と言語学諸分野とのインターフェイス（第１章）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関